

総合表現活動のもたらすもの

—上越教育大学附属中学校「表現創造科」の実践から—

時 得 紀 子*・小町谷 聖**
(平成20年10月31日受付；平成20年11月17日受理)

要 旨

上越教育大学附属中学校における総合的な学習の時間等さまざまな教科の学びがかかわった、ミュージカルによる表現活動は今年で12年目となる伝統を築いてきた。本論では、取り分け2004年度からの3年間、「表現創造科」という新設教科の枠組みのもとで試みられた、ミュージカル制作の実践に焦点を当て、この表現創造科における授業展開の中での生徒たちの変容を捉えると共に、彼等への意識調査をもとに、総合表現活動によって学習者に培われるさまざまな力について検証した。

教科横断的な学習は本来共通のテーマを基に各教科が関連して取り組むスタイルが多い中で、表現創造科の実践においては、共通のテーマを基盤としながらも、ほぼ全教科・領域に渡って表現活動を横断させてアプローチした点で独創的な取り組みであったと捉える。その結果、教科を越えた幅広い、主体的な表現の力を培うことが、生徒へのパフォーマンス評価やさまざまな意識調査の結果から明らかとなった。

KEY WORDS

表現創造科 Expression and Creation コミュニケーション力 Communication Skills
総合的な学習 Integrated Study リアル・オーディエンス（本物の聴衆）Real Audience

「表現創造科」と「ミュージカル」

新教科「表現創造科」は、前述のように2004年度から2006年度まで文部科学省の研究開発校として既存の教科を8つの新教科に再編して実施された、上越教育大学附属中学校（以降、附属中学校と示す）が設置した「さくらPLAN」の中で音楽科・美術科の学びの上に「総合芸術的な表現活動」を位置づけたものである。この新教科のカリキュラムにおける中核的な活動が12月の上演に向けた、「ミュージカル」の活動である。

表現創造科では、ミュージカルの制作を3年生の4月から12月まで長いスパンをかけて行なっている。また、ミュージカル上演に向けて、その基盤になるさまざまな力を育てる、段階的な総合芸術的表現活動を1、2年生の2年間においても実践している。この間のカリキュラムでは、総合表現活動が生徒にもたらす「生きる力につながる学び」を中心に諸活動を組み込み、今日的な教育としての総合表現活動の意義を考えることへも配慮がなされている。

「さくらPLAN」の創造

附属中学校は、1990年代後半から、「総合」と「教科」の枠組みについて常に先進的な研究を継続してきた。こうした中で総合学習「グローバルセミナー」は、1995年に、国際理解、情報、環境等の地球規模の課題を追求する場として設置され、各教科、領域の重なる教育活動を整理し、関連させる「ネットワーク化」を図り実践されてきた¹⁾。その後、2002年に「グローバルセミナー」を「未来ゼミ」「人生ゼミ」と改称し、総合と各教科の学びをより生かし、かつ自分の生活とかかわる学びを追究する未来ゼミ「地球」、自分の心身を見つめる学びを追究する未来ゼミを「心身・生活」として教育課程に位置づけた。そして、2003年に、一層の関連を図るために、総合的な学習の時間である「未来ゼミ」が教科を包み込む場を教育課程に位置づける「大教科」制度をとった²⁾。大教科制度では、2004年度からの研究開発につながる「総合社会科」「科学技術科」「生活健康科」「情報活用科」「表現創造科」「オーラルアクティビティを取り入れた英語科」を設置している。

そして、2004年度から2006年度まで文部科学省の研究開発校の指定を受け、「総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の開発——切実感を高めながら学び続ける生徒の育成——」をテーマとして、この大

*芸術・体育教育学系

**安曇野市立明北小学校

教科制度を発展させた「さくら PLAN」を創造し、教育課程に位置づけた。

研究仮説として、「総合的な学習と既存の教科の学びを一体化した教科を複数新設し、教材開発や単元構成、評価などを工夫して指導することで、生徒は教科の学びと自分の生活との結び付きや教科の学びそのもののおもしろさを認識し、切実感を高めながら学び続けることができるようになり、確かな学力を身につける。」としている³⁾。ここでいう「切実感」とは、教科の学びが自分の生活と密接にかかわっていることや、自分の内面を豊かにすることが分かり、強く学びたいと感じる気持ち、そして、教科の学びそのもののおもしろさが分かり、強く学びたいと感じる気持ちとしている。この「切実感」が、附属中学校の研究のキーワードになっている。この研究は、同校における総合的な学習と教科学習の在り方の新しい提案であると共に、新学習指導要領の改訂時にも叫ばれた「学習の生活化」の視点も強く現れており、同時に表現活動の視点にも深くかかわるテーマとなっている。

この再編8教科のうち、「今日的な課題を追究する総合的な学習の時間と既存の教科とを一体化した教科」は「総合社会科」「科学技術科」「生活健康科」であり、「創造的なコミュニケーション能力を効果的に高める総合的な学習の時間と既存の教科とを一体化させた教科」は「表現創造科」「情報活用科」「英語科」である。教科名の変化はないが、国語科、数学は目標を従来より、一層具体化した教科として設置している。こうしたさくら PLAN の3年間の研究開発の価値は高く、2006年10月13日に行なわれた教育研究協議会においても、参会者へのアンケート調査から、『何のために役に立つのか』『世の中の役に立つのか』と生徒たちの学習意欲が低下している中で、『さらに学びたい、おもしろい』『日常生活で使えそう』と有用感を持たせている。『小学校で始まった総合を中学校に当てはめるのは難しく、その点『枠組みを再編する』試みは意義あるもの。』等の声が寄せられている⁴⁾。

表現創造科設置の背景

既存の教科としての学びである「音楽」「美術」はそれぞれ単独教科として独立しているが、社会的に見た「表現」あるいは「芸術」として大衆を魅了しているものの中には、さまざまな分野を総合化し、融合を図ったものがある。TVや映画、コンサートや演劇といった、視覚・聴覚を問わない表現分野が融合したものが、ふだんの生活で目や耳にする機会が多く、総合的な「表現」としての認知度は生徒にとって高いのではないかという考察に至った。こうして、従来の教科内容が捉え直された新教科の学習の中では、生徒がふだん見聞きし、慣れ親しんでいる表現それ自体を学ぶことも視野に入れた⁵⁾。

さらに、音楽の合唱以外の場面では多数による表現を实践する機会が少ないのが現状であるが、表現創造科ではさまざまな表現領域が総合された仲間と協力してつくりあげる活動に取り組み、音楽、美術といった枠を越えた表現を追究し、創造的なコミュニケーションについて学ぶという目標を掲げた。

こうした構想のもと、附属中学校は、1997年のグローバルセミナーと教科の関連を図った活動の時以降毎年、学級単位による「ミュージカル」を創作して発表する実践を続けている。そして、この表現創造科の設立の背景にはミュージカルの実践の成果があり、カリキュラムづくりにおいては、表現創造科の学びの集大成を3年生のミュージカルの上演に据え、舞台に向けてのオリジナルな総合芸術的な表現活動を行うようにしている。

この表現創造科の設置の背景と、附属中学校全体の研究を照らし合わせると、「学びの切実感」という点で、音楽科、美術科が抱える「芸術の生活化」という課題を包括している。現代の表現、芸術は、総合化が進み、「音楽」「美術」という枠だけで括ることのできないジャンルが存在し、メディアではそのような芸術や表現の方が、認知度が高い。生徒の認知度が高い表現の学習と、「音楽」「美術」の教科の枠というギャップを埋めることで、生徒はより「切実感」を感じた学習ができるという構想は、「音楽の生活化」においても具体的な手立てであり、学校研究全体の方向性を反映しているといえよう。

表現創造科のカリキュラム

表現創造科は、主として美術科と音楽科の教諭の2名で担当している。ミュージカルの単元においてのみ、保健体育科の教諭1名がさらに加わり、指導に携わる。教科の概要、目標、評価規準、具体的な手立て、時数の運用は、表1.の通りである⁶⁾。

表1. 表現創造科の教科の概要, 目標, 評価規準, 具体的な手立て

教科の概要	音楽・美術の学習に加え、ミュージカルやビデオづくり、リズムパフォーマンスのような、既存の教科の枠を越えた幅広い表現活動を取り上げることで、表現力や創造力の向上とともに豊かな感性の育成を目指す。総合芸術的な表現活動は、表現力や創造力、豊かな感性の育成に効果があると考えられる。総合的な学習の時間との一体化により拡充した授業時間を有効に使い、音楽科や美術科単独では設定が難しかった様々な表現活動に取り組む中で、生徒の広く芸術を愛好する心情がはぐくまれることが期待できる。
教科の目標	表現および鑑賞のダイナミックな活動を通して、芸術的な表現力と芸術を愛好する心情を育てるとともに、自己の感性を磨き、自分の内面をより豊かにしようとする創造力や豊かな情操を養う。
大事にしたい学力と、評価規準（・が評価規準）	<p>意欲：周囲の事象とかわり合い、楽しみながら、自ら課題を見つけ、主体的に諸活動に取り組んでいこうとする意欲や態度。</p> <ul style="list-style-type: none"> 活動に関するテーマや、仲間、素材、用具、場所などと積極的にかかわろうとしたり、活用しようとしていたりしている。 活動を楽しみながら、自らの課題を見つけて、積極的に熱中して取り組んでいこうとしている。 <p>感性：いろいろな事象からそのよさや美しさなどを感じ取る力、またそれを生かして表現の工夫を考え、全体を構想する力</p> <ul style="list-style-type: none"> 課題における様々な表現の要素を見つけ出し、それらのよさや美しさを敏感に感じ取ることができる。 様々な表現の要素のよさや美しさを生かして、自他の表現の工夫を考えて活動や作品、表現全体の流れやかたち、まとまりなどを構想することができる。 <p>表現：自分のもっている表現技能を駆使し、自分の内面（思いや願いなど）を創造的に表現する力。</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な技能を効果的に駆使し、課題にかかわって自分の内面を創造的に表現することができる。 自らの創造的な表現を繰り返し見つめ直し、鑑賞者を魅了する表現活動を実践することができる。 <p>鑑賞：自分の感じたことや考えを振り返り、新たに得られた感じや考え、自他などのよさなどを自覚する鑑賞の能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 活動の中で、自己の感じたことや考えなどを的確に振り返ることができる。 自他の発想や表現の様々なよさを具体的に発見したり、認めたりすることができる。 自己の取組について客観的に判断し、適切に評価できる。 よさや美しさを味わい、表現の多様性を理解している。 <p>評価規準の下線部分は、十分満足できる状況を示している。</p>
具体的な手立て	<p>㊦ 芸術的な表現力や豊かな感性、コミュニケーション能力をはぐくむ総合芸術的な表現活動や鑑賞の活動を展開する。</p> <p>㊧ 目指す作品表現の素晴らしさを効果的に示す場の設定と支援の在り方を工夫する。</p> <p>㊨ 受け手を意識した発表活動を重視し、制作途中で情報や意見を交換する場を設定する。</p> <p>㊩ 生徒が自他の作品を振り返る場を設定し、一人一人が必要とする支援を行なう。</p>
時数の運用	<p>1学年 全95時間（音楽45時間 美術45時間 総合的な学習の時間5時間）</p> <p>2学年 全95時間（音楽35時間 美術35時間 総合的な学習の時間25時間）</p> <p>3学年 全120時間（音楽35時間 美術35時間 総合的な学習の時間50時間）</p>

表現創造科の概要は、音楽、美術の専門性の上に、新しい表現を創造していくという視点が見られる。目標ではそれを「芸術」という言葉に置き換えており、この教科が広く「芸術を学習する場」として創造されたことがよくわかる。従来のこのような取り組みは、教科統合による内容削減を視野にいれたものも多かったが、この表現創造科は「新しい表現の創造」を目的として、音楽科・美術科の専門性を高めて総合させるといって、中学生の発達段階に即した目標が設定されている。また、総合表現型カリキュラムにおいては、個々が表現する過程を丁寧に扱いながら、素材（基本）に戻った学習が展開される事例が多かったが、この表現創造科では、音楽科、美術科の発展的総合としての総合表現を学ぶ芸術教科であることが非常に新鮮な視点である。

表現創造科の大事にしたい学力は総合表現において必要な力を端的に示したものになっており、表現の本質である「自己目的性」の道筋を辿ったものである。意欲・感性の力は、「こういうことをやりたい、これが美しいと思う、こういうものを作りたい、等々、心の中に、ある理想像を作って、イメージとして描いてみる」段階の力として、表現の力は「表現の実現、具体化に努力を傾けて、何とかその実現まで、辿り着く」までの段階の力として位置付けられ

る。また、こうした学力と評価基準は、中学校のみならず小学校の実践においても多くの共通性が見出されるため、初等教育への活用も可能となろう。

具体的な手立てにおいては、この表現創造科で育てたいコミュニケーション力について触れており、表現を探索するプロセスで、同時にコミュニケーション力をはぐくむ活動を展開するとしている。「芸術的な表現力や豊かな感性、コミュニケーション能力をはぐくむ」ところのコミュニケーション能力は、「芸術におけるコミュニケーション」、つまりノンバーバルなコミュニケーション力も含まれ、「受け手を意識した発表活動を重視し、制作途中で情報や意見を交換する場を設定する」とは、観客とのコミュニケーションを図るための効果的なシアター教育であり、リアル・オーディエンス（本物の聴衆）からの感想をフィードバックさせ、舞台上演の質の向上を目指す学習活動につながる。同時にそのプロセスでの生徒同士の「自分の思いを表現する」言語的コミュニケーションをはぐくむことをも目指している。

時数の運用において注目されるのが、表1.の時数の運用に示されるように1, 2年生の95時間にさらに25時間が加算された、3年生の時数である。実際にミュージカルの実演を行なう3年次の1年間における圧倒的な時数の多さは、附属中学校においてミュージカルの実践が学びの集大成として据えられていることへの証しであり、ミュージカルが教育的効果を上げてきたこと、学校の伝統として位置づけられていることを示すものともいえよう。

三年間の学びの構想

表現創造科の学びの構想は、「表創音楽分野」「表創美術分野」「表創 T. T (ティームティーチング)」の3つの形態で行われる。「表創音楽分野」「表創美術分野」では、音楽科、美術科における各表現の基盤（音楽表現、美術表現の学習と鑑賞）を養いながら、「表創 T. T」において、「美術分野と音楽分野が関連する活動」「段階的な総合芸術的表現活動」を行い、それらを集大成した活動において「ミュージカル」の制作と舞台発表を行うことになっている⁷⁾。「美術分野と音楽分野が関連する活動」は、テーマにおいて関連する活動を音楽分野、美術分野で、全学年に渡って行うとともに、美術分野と音楽分野を意識したまま融合を図ることができる「映像と音の融合」「音をつくる活動」を主に1年生で行なう。

「段階的な総合芸術的な表現活動」は、作品の鑑賞とともに、舞台表現や身体表現への意識を高めるからだによる表現や手づくりショーの活動として、「身体表現と融合した活動」「集団による表現活動」「舞台芸術を意識した活動」「発展した総合表現活動」「新しい分野の表現活動」を2年生で行ない、「集団による表現活動」は3年生でまとめを行なう。これらの「段階的な総合芸術的な表現活動」は、ミュージカル上演にダイレクトに活用できる学習となる要素をふんだんに盛り込んでいる。ミュージカルの舞台発表は3年生において、4月から構想を練り始め、12月に同校の体育館ステージにおいて発表する。

この構想において、独創的であり、新しい視点と考えられるのが表創 T.Tのこの「段階的な総合芸術的な表現活動」である。ミュージカルを教科横断型の学習として行なう実践は全国でも多く見られるが、ミュージカルを行なう上で「どのような力が必要か」を過去の実践データを分析し、熟慮して構想された本実践は高いオリジナリティーを持つ。すなわち、段階的な総合芸術的表現活動において、附属中学校は3年間の研究開発でミュージカルに向けた6つの独創的な単元を構想し「表創 T.T」の時間で実践を行なった。これは、表現創造科において、「ミュージカルを行なうための資質」を、1997年初演以来のミュージカルの実践から、生徒への効果的な実践事例を分析し、単元化したものである。ミュージカルの学習においては、これまで小学校を主とした実践では、他教科の関連を見出す事例は見られなかったが、生徒自身がミュージカルそのものの学習活動からもつけるべき力を分析し、単元化したという観点からも、斬新な取り組みであったことが評価されよう。また、音楽科と美術科との合科というアプローチからも数々の単元開発が試みられた結果、生徒からは、「音楽と美術を合わせて新しい表現方法を学んだ」といったユニークな感想が得られた。

次に、各学年共に音楽科と美術科の学習を「各分野独自の学習」「分野のテーマが関連（共通）した学習」「分野が一体した学習」に区分した、2006年度の題材を表2.に示す⁸⁾。

この表2.において注目すべきは、分野のテーマが関連した学習の密度の濃さである。一つのテーマを、音楽分野と美術分野の双方の視点から学習する単元がこれだけ多くできるということは、「芸術のつながりや共通性」を学ぶことにも通じるであろう。同時に学年に応じた美術科、音楽科の時数の弾力的な運用への配慮もなされている。こうした成果からも、今後の更なる研究として音楽科と美術科の学習内容の削減を伴わず、同じフィールドの上で学習する「芸術科」の設置の可能性も見出されよう。

表2. 各学年の題材 () は時数

学年	各分野独自の学習	分野のテーマが関連した学習	分野が一体化した学習
1年	音楽「新しい旅立ちの歌」(9) 音楽「詩と音楽」(5) 美術「身近な題材を表現しよう」(5) 美術「色の世界を探ってみよう」(3) 音楽「秋の合唱コンクール」(6) 美術「デザインの楽しみ」(7)	「春の表現」(10) 音楽(5) 春を表現した音楽探し、ヴィヴァルディ「四季」の鑑賞等 美術(5) 春のイメージ、春の花を描こう等 「心の中の表現」(16) 音楽(7) 美しい日本の歌、歌に込められた情景や思いの表現等 美術(9) 気持ちをかたちで表現してみよう、イメージしてスケッチ、情景を絵や造形物で表現してみよう 「日本の伝統音楽」(10) 音楽(6) 様々な日本音楽追究活動等 美術(4) 日本の伝統美術の特徴や味わい、美術館見学	「体験! 音づくり」(8) ・音ってなんだろう ・音のサンプルを集めよう ・素材で音をつくりだそう 「附属中学校を表現しよう」(15) ・音楽と美術のつながり ・作品鑑賞 ・テレビ音楽の秘密 ・映像と音楽の融合 ・校地内散策 ・ビデオカメラの使い方 ・附属中学校プロモーションビデオ ・プロモーションビデオ学級発表会
2年	美術「風景を描こう」(7) 音楽「形式と音楽」(11) 美術「美術と形式」(5) 美術「版画の世界」(6)	「メッセージを伝えよう」(15) 音楽(10) 春の合唱コンクールで、曲にこめられたメッセージを伝えよう等 美術(5) メッセージのある美術作品、ビジュアルコミュニケーション心情を視覚で表そう等 「地域と芸術」(8) 音楽(4) 郷土の音楽、沖縄の音を聴こう 美術 郷土の作品・芸術家、現地体験調査活動等(4) 「表現に込められた平和への願い」(8) 音楽(6) 平和への願いの込められた合唱を気持ちを込めて歌おう 美術(2) 画家の描いたこと、託されたメッセージ	「からだで表現してみよう!」(11) ・ボディパーカッション「からだで演奏してみよう」 ・リズム&パフォーマンス「からだで表現してみよう」 ・影絵の表現 ・からだを使った表現の発表会 「体験!! 手づくりショータイム」(23) ・ステージショーの構想を立てよう ・楽器の構想について考えよう ・手づくりショーづくり ・創作した合奏曲、ステージショーのグループ練習 ・学年合同発表会
3年	音楽「春の合唱」(3) 美術「風景を描こうII」(7) 美術「デザインの目的」(6) 美術「自分を表現しよう」(3) 音楽「秋の合唱コンクール」(6) 音楽「卒業記念音楽会」(5) 美術「卒業記念制作」(5)	「芸術の可能性」(4) 音楽(2) 21世紀の音楽 美術(2) 現代アートの行き先、意識を変えた表現 「世界の芸術」(5) 音楽(3) 世界各地の音楽世界の楽器巡り 美術(2) 世界各地の美術、世界遺産、芸術と環境とのつながり	「体験! 総合芸術『ミュージカル』」(74) ・学級ミュージカル検討会 ・春の合唱コンクールに向けて(ミュージカルで使う合唱曲) ・舞台表現 Performance School ・声とからだでハーモニー -Let's Enjoy Chorus & Dance- ・舞台美術について知ろう ・ミュージカルのパーツづくり(パート別活動) ・ステージ練習 ・発表会 ・活動のまとめ

* 各学年ガイダンス1時間(3年生は2時間)を行なう

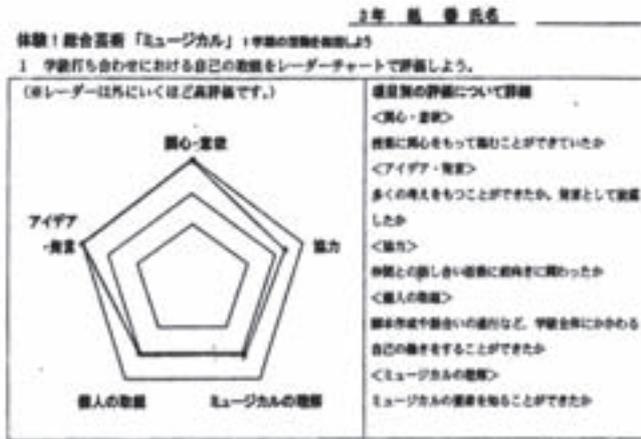


図1. レーダーチャート



図2. レーダーチャートを書き込む生徒

自己評価 レーダーチャートについて

表創 T.T の学びは個々に総合的な学びを与えることを目指しており、そのため毎時間の活動ごとに、学んだことを記録する評価カードを記入し、学びの記録を構築している。内容は、「表現創造科におけるつけたい力を各活動に寄せた観点を、生徒が自己評価をして図形に書き込む「レーダーチャート」(図1. および図2. 写真を参照)と振り返りの記述が中心であり、流動的になりがちな活動主体の時間でも必ず授業の最後に記入させている。また学期ごとの振り返りの記述等も丁寧に行っている。さらに、ワークシート、生徒の表現の思考におけるコンテ等、全てが評価におけるポートフォリオ的資料となっている。このように表創 T. T では、効果的なレーダーチャートの活用と、丁寧な毎回の振り返りの記述等のポートフォリオ的な評価により、生徒の自己評価を有意にし、生徒の学びを捉えることにつなげている。

表現創造科に限らず、芸術的な視点をういた総合的な学習は、生徒の実際のパフォーマンスが多く見られる教科である。そこで、今後の発展的な評価方法として、従来のポートフォリオ評価と共に、パフォーマンステストの導入、「羅生門的アプローチ」に基づいた評価法の導入の試みも示唆される。教育工学的なアプローチと、教科の内容に準拠した評価法を絡み合わせることで、より生徒の姿の立体的な評価が可能になるのではなかろうか。

段階的な総合芸術的表現活動の系統性

段階的な総合芸術的表現活動において、附属中学校は3年間の研究開発でミュージカルに向けた6つの独創的な単元を構想し「表創 T.T」の時間で実践を行なった(表3.⁹⁾)。これは、表現創造科において、「ミュージカルを行なうための資質」を、平成9年以来現在までの長期的な実践の成果から分析し、単元化したものである。先述したように、同校のミュージカルの実践では、他教科との関連をはかりつつも、同時にミュージカルそのものの学びからも、生徒がつけるべき力を分析して単元に組み込んでおり、こうしたカリキュラムは他に例を見ない程斬新的である。それ故に独創的な視点での活動が表3.に見られるように多彩に展開された。

生徒への意識調査から

表現創造科に取り組んで3年目の2006年12月8日、その年のミュージカル発表会終了後、附属中学校が全校生徒を対象に行ったアンケート調査の結果、「ミュージカル活動は充実していた」と回答した生徒が全体の約86%、「少し充実していたと回答した生徒が約14%で、100%の生徒が充実していたと回答した。また、1,2年生への「ミュージカルは楽しかったか。」の問いには、「とても楽しかった」と回答した生徒が90%、「楽しかった」と回答した生徒が9%であり、合わせると99%であった。

1,2年生への「来年もミュージカルをやりたいか」の問いには、77%の生徒が「やりたい」、20%の生徒が「少しやりたい」と回答しており、合わせると97%の生徒が意欲を示していた。3年生への「ミュージカルを続けてほしいか」の問いには、88%の生徒が「続けてほしい」、10%の生徒が「どちらかといえば続けてほしい」と回答し、

表3. 段階的な総合表現活動とミュージカルとの系統性

学年	実践名	内 容	ミュージカルへの系統性
1年	「高田公園再発見」(2005年度より「附属中学校を表現しよう」に改称)	身近にある「高田公園」を素材に「再発見」をテーマとして絵画を制作した。作品の着眼点(モチーフ)ごとに4人で1グループを編成し、絵画制作のテーマに沿って公園で「再発見」をテーマとしたビデオ映像を撮影し、プロモーションビデオを制作した。さらに、撮影した映像に演奏やBGM, 効果音を組み合わせ、学級で発表試写会を行なった。	音楽と美術表現の関連
	「体験!音づくり」 ¹⁰⁾ —素材からつくる音の魅力—	サウンドスケープの理論に基づき、環境にある音を持ち寄り、音の図形楽譜を制作し、音のイメージを発表し合った。	音楽と美術表現の関連
2年	からだで演奏してみよう —からだか作品, からだが演奏—	楽器を含む道具を一切用いずに、身体のみで複数の表現を行なうことを前提とした表現を行なった。「ボディパーカッション」「影絵」を既存の二つの領域からのそれぞれの内容として、一つの表現に取り入れて活動した。リズムアンサンブルを展開しながら、スクリーンに影絵として映し出されるパフォーマンスを創造することで、表現者として音・身体・形を考え、手づくりショーへつながる活動として実践し、完成したグループパフォーマンスの学級発表会を行なった。	リズムパーカッションは「手づくりショータイム」につながる。 身体表現がミュージカルにつながる。
	手づくりショータイム ¹¹⁾ —舞台表現に挑戦—	5人1組のグループで手づくり楽器, または身近にもものを使って, 2分以内の演奏を行った(STOMP)。照明や背景, 造形物の工夫もしながら, 身体表現等パフォーマンスを取り入れ, 見る人を魅了するものを目指した。	演奏形態 舞台表現 舞台づくり スポットライトの活用
3年	声とからだでハーモニー ¹²⁾ —Let's Enjoy Chorus & Dance—	ゲストティーチャーとして, 日本舞踊, バレー, ダンスの専門家を招き, 身体表現を学んだ。その後, 各学級で「さとうきび畑」の合唱に身体表現を取り入れた。	演劇性を取り入れた身体表現, 歌唱表現
	舞台表現 Performance School ¹³⁾	演劇専門家のゲストティーチャーを招き, 演技や台詞について具体的に学んだ。演劇の鑑賞・分析のほか, ペアやグループで様々なパントマイムに挑戦し, 演技力を高めた。	身体表現, ことばの表現, 演技

98%の生徒が存続を希望していた。3年生からは、「発表会を休日にできないか」と求める声もあった。

「体験!総合芸術——ミュージカルづくり——」の単元の終了にあたって、附属中学校の3年生が、ミュージカル活動と3年間の表現創造科の学びについて生徒が感じた価値や、今後どのようにこの学びを生かしていきたいと考えるのか等を詳しく知るため、美術科と音楽科の両教諭の協力を得て、「体験!総合芸術——ミュージカルづくり——」と、「3年間の表現創造科の学び」についての独自のアンケート調査を同中学校3年生を対象として2006年12月12日に実施した。この結果の分析を次に述べる。

(1) 「体験!総合芸術——ミュージカルづくり——」につながる表現創造科の学び

表現創造科の授業の中で、「体験!総合芸術——ミュージカルづくり——」の学びにおいて、特に有意義だったと生徒が感じる単元を調査するため、『「体験!総合芸術——ミュージカルづくり——」の学習に特に役に立ったと思うものを教えてください』と問うた。複数回答を可とし、5つの選択肢を設け、「5.その他」は自由記述とした。この項目ではその他を選んだ生徒はいなかった。また、どの選択肢も選ばなかった生徒は1人であった。そのため、4つの選択肢と結果を次の図3.に示す。

Q. 「体験！総合芸術——ミュージカルづくり——」の学習に特に役に立ったと思うものを教えてください

1. 舞台表現 Performance School
2. 手作りショータイム——舞台表現に挑戦——
3. からだで表現してみよう——からだが作品, からだで演奏——
4. ビデオづくり

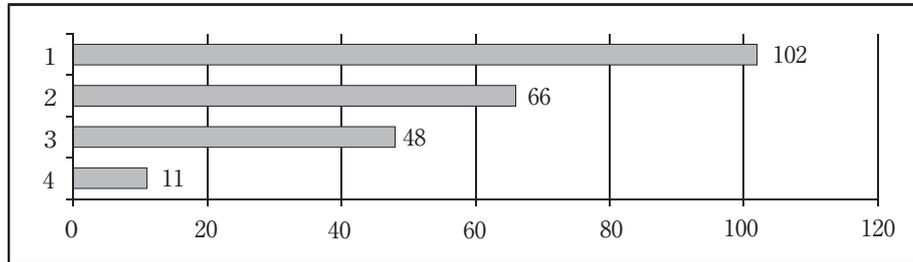


図3. 「体験！総合芸術——ミュージカルづくり——」において役立ったと思う学習ジャンル

選択肢は、3年生が3年間で学んだ表創 T.T の実践名を挙げた。本調査を実施した2006年度は全員が舞台に立ったこともあり、「舞台表現 Performance School」の単元を挙げた生徒は102名（91%）に上った。「からだで表現してみよう——からだが作品, からだで演奏——」「手づくりショータイム——舞台表現に挑戦——」は、どちらか片方、または両方を選んだ生徒は83名（80%）であった。この結果は「からだで表現してみよう——からだが作品, からだで演奏——」が「手づくりショータイム——舞台表現に挑戦——」の導入として取り入れられた単元で連動性を持っていることにも起因すると思われる。

さらに「からだで表現してみよう——からだが作品, からだで演奏——」「手づくりショータイム——舞台表現に挑戦——」を選んだ83名に、この単元のどの要素が役に立ったかその理由を問うた。この選択肢の内容には、学習指導案の目標や授業への参与観察から、生徒たちにはぐくまれていたと考えるものを配列した。複数回答を可とし、4つの選択肢を設け、「4. その他」は自由記述とした。どの選択肢も選ばなかった生徒は0人であったが、この項目においてはその他を選んだ生徒が3名いた。従って、その他を含む4つの選択肢と結果を次の図4. に示す。

Q. 「からだで表現してみよう」「手作りショータイム」を挙げた人はその理由を教えてください。

1. 自分のからだを使ったり, 身近なものを使ったりする表現でも, オリジナルな表現ができることを学んだ
2. 音楽と美術の組み合わせ方やつながりを学んだ
3. スポットライトの使い方を学習した
4. その他

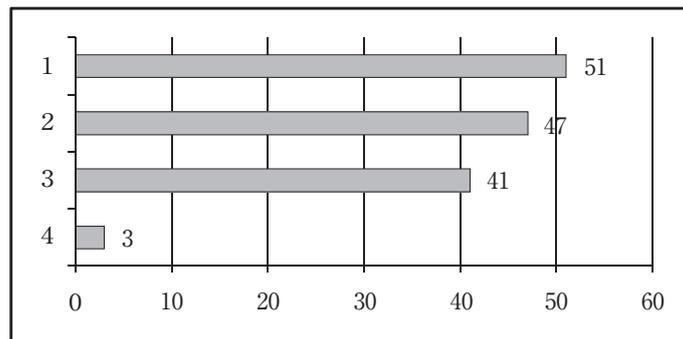


図4. 「からだで表現してみよう」「手作りショータイム」での学びが役立った理由

83人中51人（60%）が挙げた「自分の身体を使ったり, 身近なものを使ったりする表現でも, オリジナルな表現ができることを学んだ」という感想や、「音楽と美術のつながりを学ぶことができた」という47人（57%）の回答は、この二つの単元が、ミュージカル活動においての、表現や創造の視野を広げることに役立っていたことを示すものであろう。また、表現や創造において、各表現の融合、総合のさせ方を学んだ成果も伺えると同時に、新しい表現の基盤づくりのアイデアやミュージカルにおける基本的な活動の様々なスタイルを学んだ成果でもあると捉える。

その他、スポットライトの使い方は「手づくりショータイム——舞台表現に挑戦——」で学習しており、舞台照明

の際の技能的な面の先行学習として意義があったと捉える。さらに「どんなものでどんな演奏ができるか学んだ。」「自分の身体で何が表現できるか学んだ。」「一つひとつの動作の大切さ、リズムの大切さを学んだ。」など体を楽器としたり、身体表現活動の意義について述べる意見も挙げられていた。

(2) 表現創造科の3年間の学びの価値

附属中学校がさくらPLANを実施した研究開発指定期間の3年間において、表現創造科で学んだ3年生が、特に価値を感じた学びを調査するために、「あなたが3年間の表現創造科の学習で特に価値を感じたことは何ですか?」と問うた。選択肢は、授業への参与観察から、生徒たちにはぐくまれていたと考えるものを配列した。複数回答を可とし、8つの選択肢を設け、「8. その他」は自由記述とした。この項目ではその他を選んだ生徒はいなかった。そのため、7つの選択肢と結果を次の図5.に示す。

Q.「からだで表現してみよう」「手作りショータイム」を挙げた人はその理由を答えてください。

1. ミュージカル等の総合芸術の楽しさを学んだ
2. 一つの作品をつくっていく中で、仲間の大切さ、協力することの素晴らしさを学んだ
3. 舞台上で表現する経験を持つことができた
4. 音楽・美術・ダンス等の芸術のつながりや効果的な表現方法を学んだ
5. 自分の表現力を高めることができた
6. 新しい芸術の表現方法、オリジナルな表現方法を学んだ
7. 芸術的な活動や表現活動を通して、自分の違う一面を発見したり、自分を見つめたりすることができた

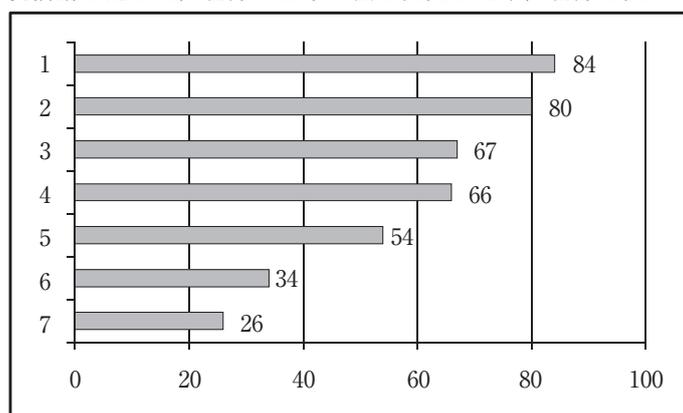


図5. 3年間の表現創造科の学びにおいて価値を感じた事柄

複数回答を可としたものの、1つだけを選んだ生徒は6名であった。また、「その他」を除く7つ全ての選択肢を選んだ生徒は10名にも上った。また、「その他」を選択した生徒はいなかった。総合芸術的な表現活動の実施を特色としてカリキュラムを組んだこの表現創造科において、1.の「総合芸術の楽しさを学んだ」と答えた生徒が112人中84名(75%)に上ったことは、表現創造科設置の意義が生徒に十分に伝わり、成果を上げたことを示すものといえよう。また、80名(71%)の生徒が表現創造科の学習で「仲間の大切さ、協力することの素晴らしさを学んだ」としていることは、このたびの学びが、学校教育の今日的な課題において、「人と関わることの素晴らしさを教える学びができた」という大きな成果にもつながったものと捉えられる。

自己評価としての、「自己の表現力」の高まりを感じた生徒も54名(48%)、また少数ながら、芸術的な活動を通して自己発見をしたり自己を見つめ直している生徒の記述も見られ、生徒の内面にも浸透する学びの基盤を築いたものと分析する。本調査は、3年間という短いスパンを経ての回答であるが、生徒から得られた成果を基に教科内容の充実を図り、さらにこうした実践研究を深めていくことで、より多くの生徒が多様な価値を感じる学習につながるものと考えられる。

(3) ミュージカルや演劇を取り入れたカリキュラムの展望

2002年度以来、総合的な学習の時間の導入と共に、ミュージカルや演劇といった、総合表現活動をカリキュラムや活動に取り入れた実践が注目されて久しい。この現状を踏まえて、実際に表現創造科でミュージカルの制作を体験した3年生の生徒に、「日本の教育に、表現創造科のようにミュージカルや劇をつくって発表する教科ができた」とす

れば、日本の小学生や中学生のためになると思うか」の設問を設け、「ためになると思う」「どちらともいえない」「ためになるとはいえない」の3つの選択肢によって、さらにその理由を自由記述によって問うた。

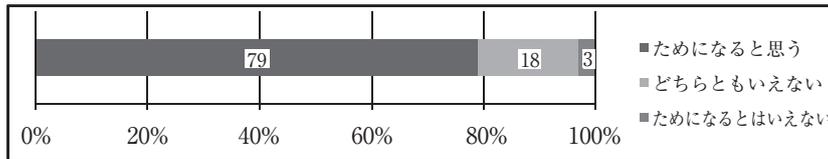


図6. 表現創造科のようなミュージカルや劇をつくって発表する教科はためになるか

その結果、「どちらともいえない」「ためにならない」と回答した生徒の自由記述に関しては、「ミュージカルや演劇は有効だが、自分たちが受験シーズンと重なっていたことで危惧する。」といった学習の実施時期のタイミングの問題や、個々の興味・関心等が異なるという視点から、「選択制度にしてはどうか。」という提案が共に少数ではあるが見られた。

「ためになると思う」という肯定的な回答をした生徒の自由記述からは、「音楽と美術の教科を融合させた新しい表現を学んだ。」「新しいものをつくる教科だった。」「仲間のよさを感じた、協力することの素晴らしさを感じた。」「ミュージカルという表現の集大成の活動ができた。」といった表現創造科の学びの中で印象に残り、かつ有意義だと感じ、受け止めている感想が多数挙げられた。こうした生徒たちの生き生きとした記述から、表現創造科の学びが如何に楽しいものであり、彼等にとって価値を感じるものであったかがダイレクトに伝わってくる。

また、「これからの生活に生かされる『表現』」について言及している生徒がいたが、これらの意見の指す「表現」とは、決して芸術的表現の技術的な向上だけを指しているものではなく、社会を生きていく上での「表現」の大切さを学んだ学習として生徒たちに認識されているという成果が伺われた。加えて、他者とのコミュニケーションや仲間と共に創造することへの意義を見出したといった意見も多く述べられていた。

表現創造科の学習は、「種々の表現力の中でも音楽的表現、美術的表現の『芸術的表現』を扱う」ことからスタートした。しかし、3年間の学びを終えようとしている3年生は、「新しい表現を創造するよさ」を認識すると共に、今後の生活に生かしていく表現力についても気付くといった多面的で長期的な視野に立った学びを形成している。このたびの学びが、単に知識として表現の価値について考えてみるといった、教科書を通じた学習に止まっていたならば、長期的に血や肉となる学びには至らなかったであろう。自分たちが直接体験したことを通して彼等が述べる、「自ら気付くことができた」とは、その学びの体験がリアルでなければ会得できなかったであろうと捉える。

故に3年間を継続してこの「表現創造科」の学びが、生徒たちの深い気付きに導かれた意義は大きい。この成果は同時に、附属中学校が研究開発の中心的なテーマに掲げた、「生徒の学びの切実感の高まり」の姿を実現することに導かれた実践であったともいえよう。

まとめと今後の課題

本論では附属中学校における、2004年度から3年間の新教科設置のもとで試みられた事例に焦点をあてた。2007年度以降はこうした教科再編の形態を解いたが、現在も音楽、美術などほぼすべての教科が総合学習とかかわり、集大成の上演までの3年間に、基盤となる様々な力を段階的に育てている。今年で12年目を迎える伝統を築いてきた舞台発表は最新の上演となる平成20年12月、3年生によって自主制作による3クラスの3作品が上演された。シナリオはもちろん、各作品の挿入曲もほぼすべてがオリジナルの作詞作曲である。ひとクラス約40名が一丸となって約45分間の舞台に取り組み、在校生、保護者、地域の方々などを聴衆に発表した。本番の上演直後、ステージの照明が消されたまさにその瞬間には、共に成功の喜びを分かち合う40名の凄まじい雄叫びが舞台上に響く。この劇的な光景も現在では恒例となっているが、在校生はこうした先輩の一部始終を鑑賞し、自分たちも団結してこのミュージカルの伝統を受け継ぎたいと気持ちを固めるという。

このように人間の心にダイレクトに響く音楽のもたらす力、さらには総合的な学習と音楽科の活動が本質的に共通しており、主体的、創造的、協同的に取り組む態度の育成やプロセス重視の評価の視点からも、双方の教科が連携しやすいことも12年の伝統を確固たるものに導いたものと分析する。そして何より同校恒例のクラス対抗合唱祭の表現力の向上を始め、音楽科そのものの充実につながったことを特筆したい。

この表現創造科の舞台上演の実践において、最も有効な手立てとなったもののひとつに、「受け手を意識した表現の改善を工夫したこと」が挙げられよう。常に、リアル・オーディエンスを意識したフィードバックにより、自らの

取り組みを客観的に見つめ直し、表現力、さらには表現意欲の向上につなげたことが、生徒等に大きな成果をもたらしたのである。同時に、制作の過程で作品の課題が多くの仲間と共有され、社会的に意義あるメッセージとして聴衆の心に届けるという視点からも、リアル・オーディエンスを意識した、舞台表現の練り上げが繰り返された。

今回の教育改革の学力観である「人間力」はこのような総合的な学びを重視し、その基盤となる世界標準学力である「キー・コンピテンシー」においても、知識・技能を問題解決や、異質な集団における理解・交流の相互作用に活かすことの重要性を指摘している。音楽、絵画、舞踊の創作、作詞等の創造的な活動は、こうした「キー・コンピテンシー」をはぐくみ、培う土台となる極めて重要な役割を担うものと考えられる。

一方、教育課程全体におけるキーポイントである「体験と言葉」についても、本論の実践事例にみる生徒による作詞の他、チームワークが要求される探求活動のプロセスでも、常時、言葉のやり取りがベースとなっていた。このように体験に基づく言葉の表現活動を組み込んでこそ、言葉で伝えたいという強い意欲が生じ、コミュニケーション力の向上が見られたり、他者とのかかわり方を学んでいく、いわば生きる力、人間力に活かすことを体得していくことが、生徒たちの表現活動のプロセスにおける、パフォーマンス評価からも明らかとなった。

そして何より、変化への臨機応変な適応力が求められる今日の世界を逞しく生き抜くためにも、総合的な学習の時間と音楽科、他教科・領域の学びがかかわったヴァイタルな表現活動の一層の充実は、豊かな創造性や独創性をはぐくむなど、次世代を担う子どもたちに必要とされる様々な力をもたらすものであると捉える。

注

- 1) 新井郁男, 上越教育大学学校教育学部附属中学校 (1998) 『中学校こうしてつくった総合学習』 教材研究開発所
- 2) 上越教育大学附属中学校 (2003) 「自分を知り, 世界とのかかわりを深める教育の創造 (二年次) - 教科の枠を超えた大教科を中心に」 上越教育大学附属中学校, 高田教育研究会編 『教育創造』 vol.144 (通巻 272 号) pp.56-57.
- 3) 上越教育大学附属中学校 (2005) 『平成 16 年度 研究開発実施報告書』 上越教育大学附属中学校
- 4) 上越教育大学附属中学校 (2006) 「文部科学省研究開発学校 総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の研究開発 (三年次) 教育研究協議会の報告」 上越教育大学附属小学校, 高田教育研究会 『教育創造』 vol.154 (通巻 279 号) pp.56-57.
- 5) 上越教育大学附属中学校 (2006) 『新たな単元開発への挑戦!』 東洋館出版 p.105.
- 6) 上越教育大学附属中学校 (2006) 『年間指導計画 さくら PLAN 2004 ~ 2006』 上越教育大学附属中学校 表現創造科 pp. 1-31.
- 7) 上越教育大学附属中学校 (2006) 『年間指導計画 さくら PLAN 2004 ~ 2006』 上越教育大学附属中学校 表現創造科 p. 1.
- 8) 6) に同じ
- 9) 上越教育大学附属中学校 (2006) 『総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した教育課程の研究開発 - 切実感を高めながら学び続ける生徒の育成 - 研究紀要 Vol. 3』 上越教育大学附属中学校 p.90.
- 10) 上越教育大学附属中学校 (2005) 『総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した教育課程の研究開発 - 切実感を高めながら学び続ける生徒の育成 - 研究紀要 Vol. 2』 上越教育大学附属中学校 要項 pp.30-33.
上越教育大学附属中学校 (2005) 平成 17 年度 教育研究協議会 表現創造科 授業資料 「体験!音づくり - 素材からつくる音の魅力 -」 上越教育大学附属中学校
上越教育大学附属中学校 (2005) 『平成 17 年度研究開発 実践事例集 (第 2 年次)』 上越教育大学附属中学校 pp.75-81.
- 11) 上越教育大学附属中学校 (2005) 『平成 17 年度研究開発 実践事例集 (第 1 年次)』 上越教育大学附属中学校 pp.65-72.
上越教育大学附属中学校 (2006) 表現創造科指導案 「手づくりショータイム - 舞台表現に挑戦 -」 上越教育大学附属中学校
- 12) 上越教育大学附属中学校 (2005) 『総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した教育課程の研究開発 - 切実感を高めながら学び続ける生徒の育成 - 研究紀要 Vol. 2』 上越教育大学附属中学校 要項 pp.34-37.
上越教育大学附属中学校 (2005) 平成 17 年度 教育研究協議会 表現創造科 授業資料 「声とからだでハーモニー - Let's Enjoy Chorus & Dance -」 上越教育大学附属中学校
上越教育大学附属中学校 (2006) 『平成 17 年度研究開発 実践事例集 (第 2 年次)』 上越教育大学附属中学校 pp.89-96.

上越教育大学附属中学校 (2006) 『新たな単元開発への挑戦!』 東洋館出版 pp.106 - 113.

- 13) 上越教育大学附属中学校 (2006) 平成 18 年度 教育研究協議会 表現創造科 授業資料「舞台表現 Performance School」上越教育大学附属中学校

参考文献

- 時得紀子 (2001) 「子どもを表現者にする総合的な学習」田中博之編『総合表現型カリキュラムを創る』明治図書, pp. 43-52.
- 時得紀子 (1999) 「音楽の授業をこう変える」水越敏之編『学校づくり・授業づくり』ぎょうせい, pp. 171-192.
- 文部科学省『中学校学習指導要領』MEXT 1-0804 (2008) 東山書房
- Gardner, H. (1994). *The arts and human development*. New York: BasicBooks.
- Greer, R. D. (1980). *Design for music learning*. New York: Teachers College, Columbia University.
- Lynch, P. (2007). Making meaning many ways: An exploratory look at integrating the arts with classroom curriculum. *The Journal of the Art Education Association*, 60(4), pp. 33-38.
- Music Educators National Conference. (1994). *Dance, music, theatre, visual, arts: what every young American should know and be able to do in the arts: National standards for arts education*. Reston, VA: Music Educators National Conference.
- New York City Department of Education. (2004). *Blueprint for teaching and learning in the arts: Grades K-12*. New York: New York City Department of Education.
- Reimer, B., & Smith, R. (Eds.). (1992). *The arts, education, and aesthetic knowing*. Chicago: National Society for the Study of Education
- Ross, S. D. (Ed.). (1994). *Art and its significance: An anthology of aesthetic theory*. (3rd ed.). New York: State University of New York Press, Albany.
- Storr, A. (1992). *Music and the mind*. New York: Ballantine Books.
- Tokie, N. (1994). Multicultural music education: The case of USA and implications for Japan. *Bulletin of Joetsu University of Education*, 14, pp. 251-263.
- Tokie, N., Endo, Y., Kami, M., & Muto, T. (2008). Effectiveness of integrated arts curriculum for Japanese students and plans for the future model in Japanese schools: To cultivate communication skills. ISME 2008 World Conference publish, ISME 2008 CD-ROM.



写真1 手づくりショータイム—舞台表現に挑戦—
STOMPを演じながら照明を確認する



写真2 からだでえんそうしてみよう—からだが作品、
からだが演奏— 身体表現を工夫する



写真3 声とからだでハーモニー—Let's Enjoy Chorus
& Dance— 演劇性を取り入れた身体表現、歌唱表現を
探る



写真4 舞台発表直前 立ち位置や照明を確認する



写真5 平成20年度ミュージカル発表会
教室での会話のシーンから



写真6 平成20年度ミュージカル発表会
ダンスのシーンから

The Importance of Integrated Arts Study

— The Case of “Expression and Creation” by Junior High School Attached to Joetsu University of Education —

Noriko TOKIE * · Kiyoshi KOMACHIYA **

ABSTRACT

From 1996 to 2007, the junior high school attached to Joetsu University of Education successfully combined music, visual arts, and dance with drama. This junior high school established a new subject named “The Course of Expression and Creation.” It is a combined subject of traditional music and visual arts. The aim of “Expression and Creation” is to cultivate wide ranges of both creativities and sensitivities to enrich one’s inner world, as well as developing the love for the art and artistic expressions, through dynamic activities in expression and appreciation of art.

The 9th grade students in the attached junior high school created their own musicals in this subject. According to the survey in 2006 for the 112 students, they showed that the curriculum of Integrated arts is very effective, not only in solving updated issues such as Japanese children’s lack of communication, but also in learning by emotion and will through their experiences. Thus, the challenge of this new approach which includes various arts genres — music, visual arts, dance and drama — made Japanese youngsters more creative in many ways.

* Music, Fine Arts and Physical Education

** Meihoku Elementary School